

## 大會抄錄

八王の亂の本質について

福原啓郎

三世紀末から四世紀初めにかけて起こった西晉宗室諸王の内亂である八王の亂は、延いては異民族の自立による永嘉の亂を惹き起こして、遂には西晉王朝の滅亡、すなわち漢帝國崩壊後中國の再統一を實現した魏晉國家體制を解體させた。このように中國史上重要な問題を抱えているのにも関わらず、その経緯の複雑さ故に八王の亂自體は十分に解明されていない。

この報告では、何故に八王の亂が宮廷でのクーデターから内戦の様相を呈するまでにエスカレートし、遂には破局を迎えるまでに至らなければならなかったのか、という疑問から出發した。まず八王の亂の個々の事件を検討してみると、最初朝廷に於いて實權を掌握する宗室（或いは外戚）がしだいに私權化の傾向を強め、こうした事態が國家の危機として意識され、公權回復の輿論が湧き上がる。次いで輿望を擔った有力宗室を中心に義軍が形成され、私權化した宗室を倒す。最後に輿望を擔った宗室が新たに實權を掌握することにより收束する。八王の亂は典型的にはこうした事件の繰り返しであり、新たに實權を掌握した宗室の私權化という更なる展開によりそれぞれの事件はたがいに連環している。このことから八王の亂は

單なる私欲にとらわれた宗室諸王間の抗争ではなく、その根底には後漢末に黨錮の禁を惹き起こした清流と濁流との抗争にも共通する「公」と「私」との對立の圖式を見出すことができる。

義門鄭氏と元末明初の社會

檀上 寛

十四世紀中葉、元末明初の激動期を金華の浦江で生き抜いた一地主家族があった。鄭氏と呼ばれ、宋以來の累世同居は、家族數二百人を擁する大地主へと成長させていた。すでに元朝の至大四年には「義門」としての旌表も受け、その名は元末の江南社會に鳴り響いたという。義門とは、累世同居という家庭内協和を前提に、日常の鄉村での賑恤等の「義行」が認められ、旌表された家を指す。いわば家庭内と鄉村とを同一視して、私を超えた公の立場に立つており、その意味では、鄉村維持型・富民・地主層の典型といえる。

順帝の至正年間、體制強化を狙って宰相脫脱を中心に對南人緩和策が實施されると、鄭氏は一族の者を元朝に出仕させた。だが反亂の蔓延するさなか、元朝の無策もあって江南地主層の元朝からの乖離が目立ち、代わって勢力をのばす朱元璋政權への乗り替えが増加する。鄭氏も至正十九年には朱元璋の旌表を受け、元朝からの離脱を明確にした。

明朝は、江南地主層の援助で成立した王朝といえる。同時にそれは、元代の江南の状況をそっくり繼承することでもあった。在郷地